

育児語について

柴田竹夫

1

生後間もない赤ちゃんに、「新生児微笑」あるいは「自発的微笑」(spontaneous smiling)といわれる現象が見られる。これは赤ちゃんに対する外的刺激による反応ではなく、赤ちゃん自身が意識的ではないにしても、自発的に行う反応である。赤ちゃんは更に生後2～3ヶ月齢になると、「社会的微笑」(social smiling)と呼ばれる人の顔に対する反応による微笑が、養育者(多くは母親)に対してのみよく見られるようになる。

新生児微笑にしる、社会的微笑にしる、これらは、養育者が赤ちゃんをかわいく思い、よく養育するようにと赤ちゃんが養育者を導くものである。ある意味で、赤ちゃんは、一方的に非力で受動的な存在としてあるのではなく、大人の養育者を、「微笑」を用いて自らの養育へと向かわせる能動的な存在としてある。

子どもからの大人に対する微笑による働きかけの他にも、一見非力な赤ちゃんには、「育児語」(母親語、マザリーズ、“motherese”，時に父親語)と呼ばれる大人による子どもに対することば(音声言語)の発話へと導く一般的な語りかけの現象が見られる。¹⁾

本稿では、「育児語」について、主に正高信男(まさたか のぶお)に依って、その機能と働きを、特にことばの面から考察する。

2

それでは「育児語」とは一体どのようなものであろうか、アメリカの言語学者ファーガソン(Charles C. Ferguson)が1966年に初めて“motherese”という彼の造語を用いたのが始まりで、正高信男がそれに「母親語」という訳語を当てた。

“motherese”は、大人による子どもへの、積極的な語りかけ、話しかけのスタイルであるが、実は母親のみが子どもへそうした語りかけをするわけではなく、父親が子に対しても、そして年長の子が弟、妹に対しても同様の語りかけをすることが認められる。²⁾

よって母親のみが子どもに対してそうした語りかけをする存在であるという誤ったニュアンス

スを避けるために、“motherese”の代わりに“infant-directed speech”，あるいは“child-directed speech”と置き換えられつつある。日本語では「育児語」が適当な訳語と考え、これを使用する。³⁾

ファーガソンは、次の六つの異なる言語文化圏で、母親の赤ちゃんに対する語りかけの比較検討を行った。つまり英語、アラビア語、アメリカ・インディアンのコマンチ族のことば、シンハラ語（スリランカのことば）、ギャク語（シベリア・ツングースの一部族のことば）、マラシ語（インド・ボンベイ南部地方のことば）という六つの言語体系である。

ファーガソンの選んだこれら六つの言語は、インド・ヨーロッパ語族とは違い、互いに類縁関係が、認められないが、母親の語りかけのことばには共通の特質があることに彼は気づき、1966年これに“motherese”と命名する。

3

では「育児語」はどのような特徴を持っているのか、(1)音の形式、(2)音の機能の二面から検討する。まずは音の形式から見てみよう。

母親が小さな子どもに語りかける時、ふつう大人に語りかける時とは大きく違い、次の二点の顕著な音の特徴を示す。(1)ことさら音の調子（高さ）が高くなり、(2)かつ同時に音の抑揚をおおげさに誇張する傾向が顕著となる。⁴⁾

育児語は、子どもが三歳未満であれば、文化の違いを超えて、普遍的に見られるものである。ここで文化の違いを超えてというのは、ヒトはそれを学習する必要が無い、つまり養育者は、育児語を生得的に持っていると考えられる。とはいえ一人っ子は育児語を発話しないとされているから、親の姿を見ての何らかの学習は必要であろう。更に、兄弟が多く、しかも年齢が接近している程、育児語を話す確率は高くなる。⁵⁾

先にあげた育児語の二つの基本的特徴を含めて Peccei は、次の様にその特徴を四点あげる。⁶⁾

1. Adults tend to use a higher pitch when speaking to young children.
2. They tend to pause more often, particularly between sentence units, and to speak more slowly.
3. They tend to pronounce their words more clearly and distinctly.
4. They tend to use an exaggerated intonation. For example they emphasize some words in the sentence far more than they would with adults, or use a very prominent 'rising' tone to distinguish questions from statements.

育児語は、胎児や幼児も快感反応を示し、その特徴を、川島隆太（かわしま りゅうた）は次の四点をあげる。⁷⁾

1. 高めの音に反応する。母親の声が赤ちゃんの声に近づくせいだと考えられる。
2. イントネーション（声の抑揚）が豊かで音楽的な語り方。
3. おなじことばの繰り返しを好む。
4. やりとりの間（ま）が大切に、間があきすぎたり、つまり過ぎたりすると不快反応を示す。

こうした育児語の音の一番の特徴は、発話において音の高さが一段高くなり、かつ抑揚が誇張されることである。子どもは、高さのより高い音によって、より強く注意を喚起される。これは子供の持つ生得的な感覚器官としての聴覚の特性と言える。⁸⁾

4

日本では壮年者が血縁関係の無い年長者に対しても、「おじいさん」、「おばあさん」と話しかける習慣がある。身も知らぬ他人の高齢者に対して子や孫でもないのにこの様に語りかけるということは、一種の敬意の表れとみなせる。⁹⁾

育児語を介して養育者たる大人と養育される子どもとの間に、緊密な心の絆が形成されるわけであるが、¹⁰⁾ 高齢者に対する育児語の語りかけにおいてもこうした高齢者と若年者との間に心の絆が形成されることがある。

なぜ高齢者に対して「育児語」が用いられるのかと言うと、正高はこう言う。

むろん高齢者に接する際には、子どもに向かって話しかけるのと同じように、遺伝的に組み込まれた行為が発現するわけがありません。しかし、子どもに向かっては口調を変えるのが常なものですから、「高齢者も子どもと同様に無力な存在」という発想が脳裏のどこかにねむっていると、思わず知らず、ついついよく似た語り口になってくるのだと、考えられます。¹¹⁾

だが育児語で語りかけられた高齢者は、これを不快と受け止めることもある。育児語は、養育者が子どもを「かわいい」と感じたならば、発話はおのずと育児語になるように、養育者に普遍的にプログラムされた行動ではあるが、高齢者へのこうした発話、それとは違い、子どもに使われる育児語の高齢者への「転用」と考えられる。高齢者への育児語は、地域差があって、アメリカでは見られないが、日本ではよく見受けられる。¹²⁾

5

では育児語の起源はというと、ヒト以外の霊長類に求められそうである。

正高はこう指摘する。¹³⁾ 子どもを引き戻す必要を感じた時は、わざわざ抑揚の激しい音を出す、つまり子どもの注意を喚起するという育児語の起源をここに見ることができる。ただ霊長類のこうした発話がヒトのそれと決定的に違う点は、ヒトの育児語は、言語獲得の促進という、まさにヒトがヒトたる所以の言語を持つ存在へと、子育てを進めることにある。子どもと養育者との間の情緒的關係にもとずいた、他者とのコミュニケーション能力の発達と共に、言語の発達を促す子育てが、ヒトの子育てなのである。

6

次に、育児語の持つ特徴の二つ目である二つの「機能」について検討する。それは(1)子どもと大人のコミュニケーション全般に関わるものと、(2)言語獲得に特異的に関わるものの二つの機能である。

これら二つの機能の検討の前に、子どもの言語発達について概観しておきたい。

少なくとも生後数ヶ月までの乳児は、親の語りかけを聞いてもそれを言語として認識していない。¹⁴⁾ そして子どもは、およそ一歳になるまで、おとなにそれと意味のわかる単語を口に出すことはない。ただ一歳未満の子の発する泣き声以外の発声は、「前言語的音声」と呼ばれ、生後六週間から八週間たって、「アー」とか「クー」とか泣き声以外のリラックスした音声を発し始める。これは「クーイング」(cooing)と呼ばれる赤ちゃんの出す最も最初の前言語的音声であり、声をあげることで、反応を促そう、あるいは要求しようとしていると考えられる。¹⁵⁾

生後六ヶ月を過ぎると、大人の話すことばへの理解に、二つの特徴が芽生える。¹⁶⁾ 一つは、子どもは親しみのあることばに強い反応を示す。特定の音の配列と、対応する事物の関連を習得し始める。二つは、大人の話し振りから、メッセージの内容を補足的に知ることができるようになる。

生後六～八ヶ月ころになると、「喃語」(babbling)が出始める。これも養育者との情緒的交流を通して、文節的発声の技術が培われ、喃語が生まれるわけである。¹⁷⁾

喃語はクーイングと違って、(1)音節が複数あること、(2)各音節が複数あること、(2)各音節が子音プラス母音の構造を持つ。ただ喃語も過渡期の喃語(アーアーアー)、ついで規準喃語(バババ)へと発達する。喃語は、大人が発する言語と共通した音響特性を持つ。

生後約十ヶ月から十四ヶ月になると、「初語」が出現する。母親からの語りかけを早く模倣できる子どもは、早くことばを話し出す。¹⁸⁾

更に一歳半くらいから二語文が出てくる。語彙数は飛躍的に増加し、二歳半頃には多語文で状況や意図を表すことができるようになり、三歳ころになると、複数の文章をつなげて話を作ったり、一連の出来事を説明したりすることができる。四歳～五歳になると、文法的に正しくことばをつなげて文を組み立てられ、接続詞を使って文章でお話しすることもできるようになる。ここに話しことばは、一応の完成をみる。¹⁹⁾

三歳頃までによく使われる「育児語」は、こうした言語発達にどのような働きをしているのか。育児語に対して子どもは、ただ意味に注意を払うのみならず、養育者との「情動的絆」を求める。この情動的絆こそが、子どもの言語発達の礎となっている。²⁰⁾

7

それでは育児語の二つの機能について見てみよう、まずは子どもと大人の全般的なコミュニケーションに関わる機能について述べる。

正高はこう指摘する。²¹⁾

そもそもおなじ声量で話したとしても、育児語の方が子どもの聴覚感受性がすぐれている事実が知られている。私たちの耳は、ふだんの話し声より高い音に対して敏感にできている。この性状自体は、聴覚器官の物理的特性にもとずいている。それに合わせるように、語りを高くしてやることで相手の反応をより強く促すことが、可能となる。

赤ちゃんが誕生直後乳首を吸い始めるのは、他者（母親）との相互交渉（他者との関わり）をするように、生得的に脳にプログラムされているからである。²²⁾

他方大人の使用する育児語も生得的なものであって、大人の感情が子どもによく伝わる。例えば、育児語で絵本を読む方が、ふつうの調子でおなじ本を読むより大人の「感情」がよく伝わる。²³⁾

つまりヒトは、共感としての言語コミュニケーション²⁴⁾、つまりことばのやり取りを通して互いに相手との心のやり取りをしており、それは相互に相手の気持ちを「推測」することに他ならず、ことばを介しての「共感」の仕合なのである。

とはいえ養育者が子どもに手厚い養育を施さなければならないというモラルは、生得的、遺伝的に大人に与えられているわけではない。²⁵⁾ 愛情はテクニックから生まれるのである。²⁶⁾

日本の母親のコミュニケーションの特徴は、オノマトペ多用と育児語多用である。こうしたことばを介した多分に情緒的なコミュニケーションを成立させているものは何かというと、それは「愛着」（アタッチメント）と呼ばれるものである。この愛着に関する理論を提出したのは、ジョン・ボウルビーという精神科医である。²⁷⁾ 愛着形式の本質は何かと言うと、それは養

育者と子どもの間に情緒的に安定した絆ができることである。²⁸⁾

川島隆太は、三歳までの乳幼児期（コミュニケーション重視期）におけることばの力を育てるやり方を次の様に言う。²⁹⁾

生後から三歳にかけて、前頭前野の神経細胞は、急激に成長する。乳幼児期の脳発達に最も重要なのは親子のコミュニケーションである。「話す・聞く」を中心とした親子のコミュニケーションを通じて、家庭の中でことばを育てることが重要である。乳幼児は親とのコミュニケーションによって語句・語彙力を身につけることができる。また、親が子どもに心を開くことで、まず、子どもの感性・情緒を育てながら、ことばを発達させていくことが重要で

す。

愛着的他者関係を結び、アイコンタクトとスキンシップにもとづく緊密な心の絆による情緒的コミュニケーションは、育児語の使用を含めての養育者の語りかけにより、子どものことばの獲得達成を助けると考えられる。

8

ここで大人と子どもの間にコミュニケーションが成立する時、何が起きているかに触れておく。

コミュニケーションには三つの類型が認められる。³⁰⁾ (1) ヒトの自律反応を媒介として成立するもの。例えば、恐怖の情動を抱くと、瞳孔の拡大が顕著になるといったこと。(2) ある特定の生体反応や行動が、仲間への情報伝達となること。例えば、自分のなわばりを守るため吼え声を発したりすること。(3) ヒトが自らの行動表出の意味を理解し、それを意図的に伝達のために用いること。つまりヒトのことばによるコミュニケーション、語りかけというのは、相手に「意図的に」なんらかのメッセージを送り合っているものなのである。

9

こうしたコミュニケーションの三類型の三番目の意図的なコミュニケーションは、いわゆる「三項関係の成立」とも結び付くことに言及する。³¹⁾

喃語は6～8月齢で出始め、生後9～10月頃になると、他者への伝達意図と、他者を手段として使う行動が出始める。

この頃子どもは、自分対他人、自分対ものへの二項的な関係から、ヒトを介してものと関わったり、ものを介してヒトと関わるができるようになる。これが共有したテーマを介して他

者と関わる「三項関係の成立」と言われるものである。

勿論、三項関係は愛着的他者関係の上に成り立っている。この時子どもは、養育者のすることとはなんでもまねる模倣期に入る。

さて、三項関係において、ものの意味だけでなく養育者との間に音声の共有化が起こり、これら意味と音声を介した二つの三項関係が、一つに統合された時に、ことばが出現する。子どもはもの（意味されるもの）と音声（意味するもの）の結び付きに気付く。

三項関係の成立、つまり「自己」（子ども自身）と、「信号の受け手」（養育者）と「もの」の介在に関する理解の発達と共に、子どもの行うコミュニケーションは、「多義性」を持つことになる。³²⁾ この多義性とは、(1) 叙述的（ものに関わる時）、(2) 情動的（子どもや養育者自身に関わる時）、(3) 要求が命令的（信号の受け手である養育者あるいは子どもに関わる時）になることを言い、子どもはこれら三つの機能を、意図的に変えることができるようになるわけである。

言語発達の礎たる愛着的他者関係が成り立つ9ヶ月頃に、子どもには三項関係が成立し、喃語が出現し、そして意図的で多義性を持ったコミュニケーションができるようになる。つまり生後9ヶ月頃に子どものことばの出現をみるわけである。ここに養育者は、「語りかけ」の重要性を改めて認識しなければならない。

10

次に育児語の機能の三つ目である、言語獲得に特異的に関わる機能について述べる。

その機能には、次の三点があると、正高信男は言う。まずは「受け狙いの語りかけ」として。子どもに受けない働きかけしか出来ない大人は、いくら愛情があっても、子どもはなんら引き付けられない。³³⁾

ふつう私たちは、育児のなかでそのことを、経験を通して身にしみてわかるようになっていく。

すると相手が「ピーン」と感じた時に、「ここぞ」とばかりに育児語を用いるという風になっていくのだ…。

では、どこで「ここぞ」となるかということ、それは結局、子供にとってお好みの音の配列パターンが登場するとき、ということになる。おなじ内容の発話を何回か繰り返し、ここが相手の気持ちをこっちへ向ける勘所がわかるや、大人はそこにさしかかると次は、育児語で頑張るようになる、という手法である。

二つ目の「模倣の促進」について。正高はこう言う。³⁴⁾

耳から入ってくる刺激に選り好みが存在するということが、模倣への動力と化している。けれども好きな音があるからといって即、まねできるというものではない。

まねるまねないには、技術的側面の問題が入りこんでくる…。

その手助けをはたすのが、育児語の重要な役目の一つとなっている。「おっ、こう言うと相手が興味を示す！」という箇所が判明するや、大人はつついそれを強調するかのようには話しぶりを変える。それが、高いトーンで抑揚のきいた話し声への変化となって現れる。しかも加えて。話し方のテンポもゆるやかになることがしばしばだ。

三つ目の「子どもの気を引くテクニック」について。³⁵⁾ 経験と模倣なくしていくら生得的とはいえ、育児語は使えない。正高はこう言う。

それどころか成人する以前に、幼い子どもとのつき合いから育まれた技術であることが、判明している。子どもという存在がなんなののかについて、全く無知で育った者が、「さあ赤ちゃんですよ」と言われ、急にしようと思えるものでは決してない。育児語使用は遺伝的に人間に埋め込まれていても、その発現は私たちが発達の途上で、ほかの子どもと密に交渉するという機会を持つことを前提にしているのだ。

川島隆太はこう言う。

ヒトの前頭前野の神経細胞は、生後3歳までの間に急激に成長する。そしてこの前頭前野を刺激し、発達させ、より複雑な言語を扱うための器として育てるのは「他者の語りかけ（特に母親の語りかけ）」である。³⁶⁾ この語りかけによって子どもの脳は発達し、ことばの獲得の第一歩となるわけで、この時「育児語」、「オノマトペ」は、乳幼児の脳の広い範囲に働きかけている。³⁷⁾

オノマトペの多用は、日本語の特徴であり、養育者は子どもにことば（語い）の獲得をより容易にする。更に育児語とオノマトペの多用からはつぎのことが言えよう。日本の養育者は、情緒的コミュニケーションの確立に重きを置き、子どもとの一体感をもって子どもに接していると。アメリカでは、オノマトペはあまり使用されず、日本では多用されることは、情緒的コミュニケーションを重視する日本文化の特徴を反映していると考えられる。つまり自らの発話を未熟な子どもの発話に合わせようとするのは、「思いやり」の気持ちの表れかもしれない。³⁸⁾

こうしたことから言語獲得の特異的に「関わる機能を持つ「育児語」と、そして「オノマトペ」も、子どもの言語獲得に欠く事のできないものと言えよう。

ヒトの養育者と子どもにおいては、情緒的關係がまずあって、その上に言語（語彙）習得が成立する。つまり語彙習得のためには情緒的關係によるコミュニケーションが不可欠である。語彙獲得の上でも、情緒的關係によるコミュニケーションの上でも、養育者と子ども（3歳未満）の愛着關係によるコミュニケーションにもとずいた語彙の獲得に、育児語とオノマトペが有用性を持つ。

養育者との緊密な心の絆を結び、情緒的、意図的コミュニケーションと愛着的他者關係による三項關係の成立、そして喃語の出現する9ヶ月頃は、多義性を持つコミュニケーションを通して、子どもにことばの出現が見られるようになる。それは言語発達の礎が築かれる重要な時期なのである。2歳台になると養育者との分離不安が薄れて「語彙爆発期」に入る。

かくして「育児語」は、子どもの言語発達の面からも、コミュニケーションの面からも重要性を持つ。³⁹⁾

注

- 1) 桜井茂男他『子どものこころ－児童心理学入門』（有斐閣，2003年），6～7頁。無籐隆他『発達心理学入門Ⅰ』（東京大学出版会，2000年），56～7頁。
- 2) 正高信男『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』（講談社，2001年），15～18頁。父親による育児語の考察は、拙稿『父親語と絵本について』（『神戸親和女子大学教育専攻科紀要』第12号所収）を参照されたし。
- 3) 正高信男『ヒトはいかにしてヒトになったか』（岩波書店，2006年）。83～5頁。
- 4) 『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』，17頁。
Cf. 育児語は“baby talk”とは似て非なるものである（『発達心理学入門Ⅰ』，114頁）。
- 5) 『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』，35；37頁。
- 6) John Stilwell Peccei, *Child Language*, 2nd ed. (London: Routledge, 1999), p.56.
- 7) 川島隆太他『脳と音読』（講談社，2005年），68頁。
- 8) 『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』，22頁。
- 9) 同上書，144～6頁。
- 10) 正高信男『老いはこうしてつくられる』（講談社，2002年），114頁。
- 11) 同上書，124頁。
- 12) 『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』，136；138頁。三歳児が二歳年下のきょうだいである乳児に話をするばあいですら、育児語が出ることもある（正高信男『ケータイを持ったサル』〔中央公論新社，2003年〕，73頁）。
- 13) 正高信男『0歳児がことばを獲得するとき』〔中央公論新社，1996年〕，164頁。
- 14) 『脳と音読』，90頁。
- 15) 『0歳児がことばを獲得するとき』，164頁。
- 16) 『0歳児がことばを獲得するとき』，22；26頁。

- 17) 正高信男『子どもはことばをからだで覚える』〔中央公論新社, 2001年〕, 172頁。
- 18) 『0歳児がことばを獲得するとき』, 116頁。
- 19) 『子どものころ』, 60頁。
- 20) 『0歳児がことばを獲得するとき』, 110頁。
- 21) 『ヒトはいかにしてヒトになったか』, 85～6頁。
- 22) 『0歳児がことばを獲得するとき』, 17頁。
- 23) 『ヒトはいかにしてヒトになったか』, 86頁。
- 24) 同上書, 115～6頁。
- 25) 同上書, 95頁。
- 26) 同上書, 94～5頁。
- 27) 小嶋秀夫他『発達心理学』(放送大学教育振興会, 1999年), 63頁。
- 28) 正高信男『育児と日本人』(岩波書店, 1999年), 22～3頁。
- 29) 『脳と音読』, 122頁。
- 30) 『0歳児がことばを獲得するとき』, 142頁。
- 31) 『発達心理学入門Ⅰ』, 111～2頁。
- 32) 『0歳児がことばを獲得するとき』, 136頁。
- 33) 『ヒトはいかにしてヒトになったか』, 86～8頁。
- 34) 同上書, 88～90頁。
- 35) 同上書, 93～4頁。
- 36) 『脳と音読』, 75 ; 117頁。
- 37) 同上書, 88頁。
- 38) 桐谷滋編『ことばの獲得』(ミネルヴァ書房, 1999年), 189～90頁。
- 39) 『脳と音読』, 122頁。